

寄稿

昨年度、6歳未満のお子様より臓器提供があり、そのお母さんから当協会に手記が届きました。お子様のご冥福をお祈りすると共に、ご家族への敬意を表し謹んでここに掲載いたします。

春に娘が遠くへ旅立ってから、初めての誕生日を迎えました。その日、私にできたのは娘へ手紙を書くことでした。



〇〇ちゃんへ
お誕生日おめでとう。
お友達といっしょに、リハビリがんばっているかな？
ママはあなたと離れていて、とってもさびしいです。
でも、あなたが遠い場所で頑張っていると思うと、
ママもがんばれるよ！ずっとずっと応援しているからね。
生まれてきてくれて、本当にありがとう。

ママより



移植医療の天使
“ハーティ”

「脳死状態です」・・・

そう医師から告げられたとき、私は現実を受け止めきれず、気づけば涙が止まりませんでした。

治療を“続ける”のか“やめる”のか。どちらを選んでも、娘の“死を待つ”ように思えて苦しかったのです。

治療を続ければ、身体が限界を迎えていずれ亡くなる。やめてしまえば、少し早くそのときが来るかもしれない。

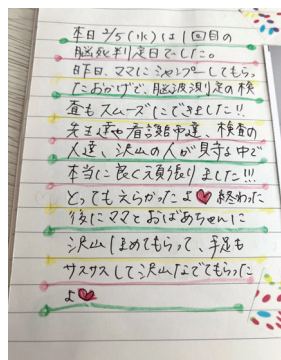
私には、前向きな未来が見えませんでした。

そのとき、ふと“臓器提供”という言葉が頭に浮かびました。

私は医師に尋ねました「この子の心臓を必要とするのは、同じくらいの年齢の子ですか？」

医師はうなずきました。

私ですら、娘を失う悲しみを抱えてこんなに苦しいのに……。もし同じように、小さな命が今まさに失われようとしているのだとしたら……。その子の命が救われて、その家族が同じ悲しみを経験せずに済むなら……



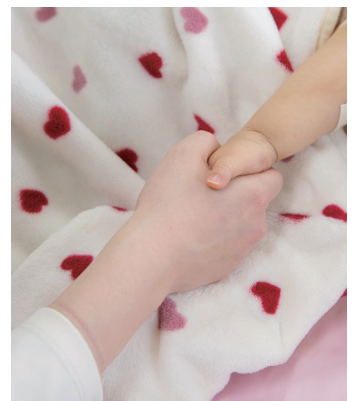
※入院時のICUダイアリー

私と同じような思いをする人が、ひとりでも減ってくれたらいい。

たとえ娘が、娘としての人生を最後まで生きられなかったとしても、誰かを救って、その子が元気に生きてくれるのなら……。

それが、娘の“生きた証”になってくれたら。そう思って、私は臓器提供を承諾しました。

娘は、関わってくれる人のことが大好きで、誰にでもまっすぐな笑顔を向ける子でした。たくさんの人に愛されて育ったあの子なら、誰かの力になれることを、きっと喜んでくれるはず。そう思えたのです。



会いたい気持ちは消えないけれど、娘の笑顔を思いながら手紙を書いたその時間は、娘が心にそっと“光”を届けてくれたような気がして、涙が止まりませんでした。

向こうで出会ったお友達が、今までできなかったことや、娘がこれから経験していくはずだったことを、一緒に叶えていけるよう願っています。

あの娘の中の「生きる力」が、どこかで誰かの明日につながっていると思えることが、今の私を支えてくれています。娘の命が確かに輝いていたことを、これからも私の人生でしっかりと伝えていきます。